



セイロン遊記抄

前田聽瑞

一 コロンボの半日

昭和三年九月四日。午後故國へ急ぐ白山丸の人達と別れて單身コロンボに上陸した。コロンボの上陸は二回目であつた。が、今度の上陸はセイロンから印度への旅がその目的である。私はこれこいふ準備もなく同行者もなしに、この大旅行をするこの無謀さを、つくづく感じてはゐた。

しかし、私はごんな犠牲をはらつてでもセイロンを見よう、印度へ行きたい、こいふ希望で身心共に張りきつてゐた。セイロンの古都アヌラダプラ、印度は純印度教的なマズラ (madura) の町、ジャガナート (Jaganath) ; 世界の主を意味し毘紐致神^{ヴィシヌ}として禮拜されてゐるクリシュナの名である) 祠をもつて全インドに鳴れるプーリー (Puri) の町、佛陀伽耶の佛塔に菩提樹の濃き緑の葉、聖都ベナレスに戀の記念のタジ・マハル (Taj-mahal) (超人の如き雪山、海の如きガンジスの流れなきが私の血を湧かせ肉を躍らせた。それだから、單身孤影、セイロン・印度にひつばられて行くにしても、私としては元より覺悟の前である。

コロンボは二度來てもいゝ町である。コロンボに於ける私の滞在は僅か一日の豫定なので、私は自動車を驅つて食らやうにこの町を見廻はつた。途上、コロンボ特異の、すばらしい情景が私の左右に開展した。コロンボ見物は二度目であり、又いろいろの風景畫で馴染んでゐるが、今は纏つた姿で自分の前に現はれたやうに思はれた。

コロンボの中心街は歐洲をかけ廻つた私には別に珍らしくはないが、土人街ベター(petah)の光景は私の目を惹きつけた。街路は狭くて兩側に丈の低い赤瓦葺の家が立並んでゐて、一種異様の臭氣、熱帶地特異なげく、しい色彩、それに非常に騒々しいので、みる者を驚かせる。ドリアン(durian) パンヤ(papaya) チク(chiku) バナ、なぎを雜然と並べた果物屋。椰子油を賣る店。鼈甲を賣る店。店先きで土人の頭に剃刀をあてゐる理髮屋。かうした街路を赤い華やかな更紗模様や白木綿の腰巻一枚で、しかも跣足のままで往來する黒ん坊。鼈甲の櫛を小さな髻にさして澄し込んで行く半裸體跣足の男。ベテル(Betel)を嚼んでは血の様な唾を吐きちらして行く土人の動き。黄ろい袈裟を纏ひ蝙蝠傘を翳す跣足圓頂のお坊さん。この往來の間を、車の上にアンペラ製の彪大な幌を持つ水牛車が行く。「熱帶やトンネルを曳く牛車かな」。すべてが違つた地帯に居ることを思はせる。序に土人一般の嗜好物であるベテルは具さにはピパー・ベテル(piper Betel)云ひ、梵名はタンブーラ(tambūla)云ひ。一種の蔓草で、この葉に練つた石灰(貝殻より採りたる)と檳榔子の果實を薄く刻んだものを包んで嚼むと、口中爽快を覺え、齒を強壯にし、且つ消化を助ける云ふ。「大史」(mahāvamsa)にもベテルの嗜好には石灰が附きものであることを述べてゐる。三種の材料が混合するので唾液は深紅色を帶び、齒や唇は眞赤に染まり、口中がひりつくので處かまはず矢鱈に赤い唾液を吐き散らす。柱や壁や街路に散々赤い唾液の跡を見るのは不快といふも愚かである。しかし、かうした地點に親しく立ち得たことは、旅人としての私には充分の満足があつた。

土人街を出た私は大急ぎでこの町を駆け廻つた。マリガカンダ(maligakanda)佛寺、印度教の古刹、博物館を見た。こゝには再び全く新しい、私の知らない世界が開かれてゐた。

博物館は町の南ヴィクトリア公園にある。その創設は千八百七十七年で、佛教美術の逸品佳什をはじめ古器類・動植物の標本・産物等々を出陳して、見るものを驚かせてゐる。同館では夙に學術的な目錄を作つて一般に頒つてゐる。館

内には圖書館の設備さへあつて一般に公開してゐる。歐洲で巴里のルーヴル博物館やミューゼー・ギメー、さてはロンドンの大英博物館、柏林の人類學博物館、ミュンヘンのドイツ博物館等を見て來た私には、こゝの博物館は別に驚異の存在ではなかつたが、しかし私はこゝでも見るべきものを見、楽しむべきものを充分樂んだ。殊にアヌラーダブラ將來の佛教古美術をこゝで親しく見せつけられた私は、明日からの幸福なる旅をみんなにあこがれたこゝか！。

晩はグローブ・ホテル(The Globe Hotel)で旅裝を解いた。

夕食後、私は海岸に出た。月明の夜、椰子の國コロンボの海邊をさ迷ひ歩く美しさは、實際それを見た人でなければ想像するこゝが出来まい。私はこの美しい夜を充分にかつ完全に享樂した。それから私は方角だけを注意しながら夜の町を歩き廻つた。そこには夜を樂しむ國の姿が思ふ存分くり擴けられてゐた。

少し疲れて來たので、ミカド商店で土産物なごを整へて宿に歸つた。

ホテルの一室で明日からの旅の準備をした。ジョン・マレー(John murray)の案内記(A handbook for travellers in India, Burma and Ceylon)には、セイロンの旅が極めて容易なこゝを、そして佛齒寺キャンデー(Kandy)古都アヌラーダブラそれからポロナールヴ(Polonnaruwa)の廢趾なごは是非見ねばならぬ、といふこゝを書いてゐる。又誰しもそう述べてゐる。言ふまでもなく、セイロン史の主要事件は(一)阿育王の傳道師派遣で佛教がセイロン島に傳來したこゝ(二)八世紀迄のアヌラーダブラ(Anurādhapura)の首都(三)八世紀から十三世紀迄のポロナールヴの首都(四)十六世紀からのキャンデーの首都及び(五)千八百十五年に於ける英國の占領である。就中キャンデーは會遊の地であり、ポロナールヴは行程の都合で最初から斷念してゐたので、豫定通り明日は愈々自分ひこりでアヌラーダブラに立つこゝにした。いくら懂がれの土地でも見知らぬ國へのひこり旅に、私がそんなに氣を揉み、又ぎんな氣持でホテルの夜を明かしたかは諸君の判斷に任せたいと思ふ。

二 アヌラーダブラへの旅

九月五日。今日の晝すぎはいよく、アヌラーダブラだ。今もなほ私にはそれが信ぜられない。

午前七時半に私はコロンボを立つた。列車の走るにつれて椰子の國バナ、の國の情景がいよく美しく開展する。私は車窓の兩側に思ふ存分葉を張り擴けてゐる椰子の森に依つて不斷に迎えられた。それから非常によく繁つたババヤ檳椰子などの熱帶植物が絶えず豪華な眺めを見せてくれた。バナ、の實が鈴なりになつてゐる。椰子の木蔭に半裸跣足の女たちが何をか囁いてゐる。遊行せる黄衣の坊さんに善男善女が胡跪合掌してゐる。すべてが立派な繪である。午前十時頃列車はボルガハヴェラ (pogahwela) 驛に着く。こゝは佛齒寺キャンデーへの乗換場所である。黒光りのした土人の賣り子が車窓に集つてくる。晝頃から山間を走る。微風吹動、車内は存外涼しかった。沿道、こころよく山火事の跡が特に眼をひいた。車中で面白かつた昨日からの日記を速かにやり遂げた。午後一時すぎ、列車はいよく慄がれの地アヌラーダブラ驛に近づく。緊張せる期待の數瞬間よ！

アヌラーダブラは楞伽 (Lankā: セイロンの古名) の最も美しい、楽しいそして最も勝れたる城市である。この都は阿窺羅陀 (Anurāḍha) の住所といふ意味に於て阿窺羅陀市と呼ばれ、又アヌラーダ (Anurāḍha) 星宿の下に建設せられたのでこの名がある、と傳へられてゐる。この都は所謂セイロン先史時代のバンジーカーバヤ (pandukābhaya) 西紀前三七七年即位——以來の王都であるが、佛教の渡來と共にこゝに寺塔建立のこゝがあり、その後百五十年セイロン稀代の英主ヅッタ・ガーマニー (Dutthagāmanī) がタミール王エラーラ (Elara) を伐つて王位に即くや、宏壯なる大塔ソナマリー (Sonamālī. 今のルワンヴェリ Ruwanweli = Gold-dust Dagoba = 金塵殿) 銅殿 (Lohapāsāda) を造營して、市の面目は全く一新され、爾來歴代の諸王は相競うて寺塔を建立し、こゝにアヌ市はセイロン文化の心臓として更に佛教

都市として永くその独自の機能を十二分に發揮した。この大アマ市、この千年の古都が時代の變轉と共に第十三世紀の始めには一時全く林藪の中に埋れてしまつた云ふのだ。私は今この大アマ市の廢墟に巡禮の杖を曳かうといふのである。

三 途上無畏山寺を仰ぐ

驛前で牛車(ハツカリー)を拾ふ。車に乗るに、黒ん坊の馭者が水牛を追つ立てる。街道は平々坦々である。兩側には熱帶植物の豪華版が展かれてゐる。車の進むにつれて遙か右方の小丘の上に一の廣大な寶塔の聳ゆるを見る。これこそは即ち西紀前八十年頃かの敬虔な阿婆耶 (Abhaya) 王が幾多の年月を犠牲を拂つて造營した無畏山寺 (Abhayagiri-vihara) の寶塔である。私は告曰する。一種の崇高な氣が私を襲ふたことを。私が忽然としてこの權威ある由緒に富む大塔を眼前に見た時に。私は既にセイロン史や法顯の旅行記などで幾たびか心にこの寶塔に巡禮したのである。無畏山寺が如何に強く魂を捉へたことがあつたにしても、それは畢竟たゞ淀の川ほとりに於てその自坊の書齋裡に於ける靜かな精神的享樂に過ぎなかつたのである。實際のありのまゝの無畏山寺は私に取つては永遠のあなたに横つてゐるかのやうに思はれてゐたのであつた。然るに今やこの現實が忽然として私の眼の前に立つたのである。惠まれたる運命が私をこゝセイロンはアマラーダブラの傳奇世界に導いて來たのである。嘗つては想像の世界であつたのが今はすぐ私の前に横つてゐるのである。眞の形體ある無畏山寺の寶塔そのものが。

今は空しく聳ゆる無畏山寺の塔影にありにし、セイロン文化の權威ある傳説が讀まれる如く思はれる。

無畏山寺を思ふに法顯三藏を思ふ。法顯は印度巡遊十有餘年、更にセイロンに飛錫し、一日無畏山寺に詣でた。法顯は佛前に合掌瞑目これを久しうした。不圖頭を擧げると、一商人が白絹の扇を佛に手向けてゐる。その白扇は法顯が魂

の奥底に寸時も忘れ得ない故國の象徵ではないか。胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巢ふ。人誰れか故國を思はざらん。法顯はその自傳に當時を述懐して言ふ。

法顯漢地を去つて積年、與に交接する悉く異域の人。山川草木舉目舊なし。又同行或は袂を分ち或は流亡す。影を顧るに唯己のみ。心常に悲しみを懷く。忽ち此の玉像の邊に於て商人の白絹の扇を以て供養するを見、覺えず悽然として涙下つて目に滿つ。

國を去つて既に十有餘年、遊子豈に慕郷の情なからんや。今セイロンに遊んで椰子の木蔭にその無畏山寺を仰ぎ見た私は、轉だ感慨無量、感傷に堪へざるものがあつた。

間もなく村落にさしかゝつたと思ふに、今度は私の眼前には聖なる菩提樹がその偉容を展開し、銅殿の廢趾なきが一眸の裡にあつまつた。牛車は村落の靜かな往來の間を縫ふて、午後二時頃宿に着く。宿は地名と同じアヌラーダブラ・ホテル。形勝の地を占め、設備萬端甚だ整つてゐた。薰風嫋々、椰子樹を吹き渡る廣いベランダで愉快な、質素な食事を取つた。こゝへ來る途中ですら、尙不安であつたアヌラーダブラへの旅。こゝに來て始めて私はアヌラーダブラへ來たことを確信することが出來た。

四 見 學

アヌラーダブラに於ける私の滞在は今日限りなので、私の時間を出來るだけ利用したいと思つて、早速自動車を命じた。アヌラーダブラについては、既に多くのことが物語られ、また書物にもなつてゐるから、私はくどくどしい叙述は止めて、たゞ私の印象を中心に書き綴るこゝにする。

午後三時頃には、私はルワンヴェリの大塔に登つて惠まれた見學を充分樂んでゐた。この大塔こそは實に英主ツタ

・ガーマニー王を偲ぶ記念物の最たるもので、この塔内には印度から將來された釋尊の遺骨と寶石で作つた菩提樹が納められてあると云ふ。

大塔の北四百ヤードのところに塔園精舎 (Thūpārāma-vihāra) の趾がある。こゝはセイロン王天愛帝須 (Devānampiyatissa) が阿育王の好意に依る佛舍利を奉安するために造營した精舎である。今は心なき手入れが施されてゐるので、少なからず私を失望させた。

車は間もなく叢林の中を進んでゐた。樹の間で猿が戯れてゐた。巨大な佛陀の坐像がこゝに幾世紀かの星霜にも反抗して立つてゐた。この佛像はクーマラスワミ (Coomaraswamy) 氏の「印度及びセイロンの美術・工藝」(The arts and Crafts of India and Ceylon. 1913) にある挿畫(第二圖)で馴染んでゐたので異域で知己にめぐり合つたかの感があつた。そして私はこの像をあかず眺めた。それは全く特異の魅力を持つてゐるやうに、私には思はれた。私はその姿とその場所のイリュージョンに暫し我を忘れた。

その次に、私は又書齋で親んでゐたありにし僧坊の「半月石」(Moon-stone) を見せつけられた。中央には蓮華が彫られ、鷺鳥・簇葉・動物(獅子・馬・象・牛)の順序で同中心の環を遠心的に刻り展けてゐる。淺浮雕の作品で、これよりも見事なものを、私はこれまで餘り見たことがない。この作はこれからはセイロン美術の最も優雅な時代の一例として私の腦裏に残るであらう。

それから私はランカラマ (Lankarama) の塔下に出た。塔は紀元第三世紀に建立されたと傳へられてゐるが、現在は無益な修理が施されてゐるだけ、學的巡禮者にこつては寧ろ嫌惡な存在である。あたりの光景は有益でもなければ、愉快でもなかつた。

巡禮の途次、私は度々七頭の龍 (Nagas) を刻んだ石片にぶつかつた。挿繪や書物を讀んだものを、私は今は實物を見

てゐるのだ。すべては私が考へてゐた通りであつても、しかもすべてが新しい。

終ひに私はイスルムニ (Isumuni) 或は Isumuniya) 窟寺に導かれる。こゝはその昔阿育王の子摩晒陀 (Mahinda) 來教の際、帝須 (Tissa) 王が建立するころで、セイロン最古の窟寺である。今から五六十年前はこの界限は數林の中に埋もれてゐたが都督ウィリアム・グレゴリー (William Gregory) のお蔭で開拓されたのだ。寺僧は語る。こゝには聖池の岩壁に刻まれた禪觀的な坐像と象がある。沈靜と典雅さが支配してゐた。歸る時刻になつても、低回する能はざるものがあつた。そして五時近くになつてやつとホテルに歸つた。

今日の緊張した見學ぶりは一杯の美酒を手にして休息するだけの値打は充分あつた。しかし夕食までにはまだ時間があるので、私は今度は案内人を連れずに聖菩提樹の方へ足に任せて歩いて行つた。丁度村人が三々五々池で沐浴してゐるのが眼についた。それは云ふまでもなく貯水池である。クーマラスワミ氏は貯水池のこゝに關してかう述べてゐる。

セイロンは貯水工作には早くから惠まれてゐた。貯水池の堤防で最長なのが九哩、面積の最大なのになるゝ六千哩もある。最古のものは恐らく紀元前四世紀に溯るであらう。茲に注意すべきはかうした大工事に要した勞働の量よりも寧ろ土木術に早くもその優秀な技倆を見せてゐることで、水門工事については殊にそうである。紀元前二・三世紀ごろの水門は實に後世の準繩であり、又近代水門工事の最も重要な先驅をなすものである。(第四章建築)。

一概に貯水池と云つても昔時は(一)飲料(二)沐浴(三)洗濯(四)灌漑などそれら一定の用に供せられたものであつた。然るに今は何事ぞ、或は浴し或は飲み或は濯いでゐる。私はこの不快な光景をよく心に記した。

それから此地に巡禮した願望の一である「菩提樹」の方へ足を進めた。平地から約二丈もあらうと思はるゝ崖の上に聖なる菩提樹は四方に枝を擴げてゐた。私は境内にこぼれてゐる菩提樹の葉を拾つておし戴いた。そこには敬虔な參詣

者の一群があつた。私はこの群に混つて正面の石段へ急いだ。石段の下に安置されてゐる一基のガネーシャ(Gaṇeśa)の石像が特に私の眼をひいた。ガネーシャは象首人身・長腹・長耳の奇異な形相をした印度教の神で、排難の神・智慧の神として祀られてゐるものである。佛教に云ふ俄那鉢底(Caṇḍapāṇi)はこの異稱で、我が國では普通歡喜天・大聖歡喜天・大聖天・聖天の名で祀られてゐる。

菩提樹は思ふた程大きくはなかつた。聖樹は六間四方、高さ一間の石垣の上に鐵柵で圍繞されてゐる。聖樹の前には燈明が點ぜられ、淨花が捧けられてあつた。柵の内では寺僧が經を誦してゐた。私も默拜、四誓偈を誦した。善男善女は或は胡跪し或は五體を地に投げてゐるのもあつた。こゝは世にも珍らしい聖境である。私は靜かに、いかにも心ゆくばかりの時を過ごした。私はこれまで度々數々の寫眞なきで見たこゝのあるこの聖樹を眼のあたりに見て、歡喜踊躍の感を禁じ得なかつた。特に敬虔なセイロンの人たちがその前景になつてくれたので、眞に愉快であつた。

菩提樹はまた阿說他(Āśvattha)樹又は畢波羅(Pippala)樹とも云ふ。この樹は夙にその神聖を以て印度宗教史上に重要な地位を占めてゐる。勸學渡邊海旭師はその「聖菩提樹考」に於て Āśvattha 樹を説いて、Āśvattha は Āśva(馬)のśita(依止)の合成語で、馬の依止する所、馬の止住する處の意であるとし、

若人一たび馬住樹の名を聞かむとき、其心頭に湧起し來る聯想は何ぞや。或は鶴髮童顏の老婆羅門が駿馬を翁髻たる綠樹の下に繋ぎて、ガーヤトリの聖句を頌する崇高の景もあるべく、或は金甲寶鐙、劍戟旌旆天日を遮蔽して、威武四隣を壓する雄王が、百馬をこの聖樹の下に宰して、祭壇の煙、直ちに因陀羅^{インドラ}の宮を衝くが如き壯觀もあらむ。

こその宗教的性質を叙し了りて、更に長阿含經の文なきを引用して來つて阿說他樹^{アシュバツタ}菩提樹が異名同體であるこゝに及んでゐる。吾々は又カータカ・ウバニシャット(六・一)が雄大崇高の辭を以て、この樹の神聖を頌するを見る。

根を上にし枝を下にする、この太古よりのアシュワタ(Āśvattha)樹、これのみこそは清淨なれ、これのみぞ梵なる、そ

れのみこそは不死なれど、人は言へり。全世界はそれに依存し、何物もそを超ゆることなし。

かくこの樹は夙にその神聖を謳はれたが、その昔佛陀釋尊がこの樹下で大覺成道せられたので、遂に菩提樹 (Bohi-tree) として崇拜の對象となり、殊に伽耶の菩提樹にアマラーダブラのそれは佛教徒の最も尊崇するところのものである。云ふまでもなく伽耶は正しく佛成道の聖地、アマラーダブラは阿育王子摩晒陀の妹サンガミッター (Sugamitā) が殊にその一枝を將來してここに移植したに由るのである。菩提樹の渡來とその歴史は悦びと感謝の情のために編まれた「大史」の中に美しく叙せられてゐる。これも角菩提樹そのものが今日なほ若き王女の完き殉教的傳道の記念として崇拜されてゐるさういふことは、何よりも愉快な感じを私に與へた。

私はそれから佛殿に參詣した。殿内に於て私は金赤色に輝く成正覺の釋尊像を拜した。そして私はその瞬間思はず「哀受施草」、敷佛樹下、跏趺而坐、奮大光明、使魔知之、魔率官屬、而來逼試、制以智力、皆令降伏、得微妙法、成最正覺」の文を誦した。佛殿を出るに、一帶の夕煙、渺茫として聖樹の外に横はり、歸禽聲なく、坐ろに懷古の感に堪へざるものがあつた。

歩を轉ずればそこは名にし負ふ銅殿 (Lohapāṇḍita = Brazen-palace = 眞鍮殿) である。「國破れて山河あり、城古りて草木茂る。」唯見る丈餘の石柱の林立、殘礎草萎々。けれども、今は昔この銅殿の大は實に三十間四面、千六百の石柱を以て九層を支へ、各層に百の重閣あり、重閣は悉く白銀を以て飾られ、珊瑚の祭壇は種々の寶石で輝いた。更に殿の中央に寶石の亭があり、亭の中には水晶の座をもつた象牙の輝く王座があつた。その壯麗は忉利天宮の如く到底言辭の盡すところではない。「大史」の筆者は述べてゐる。

ホテルの夕食は大變うまかつた。食後、面白かつた一日の報告を故國の老師と學友、知己に書き送つた。私は終日の見學と驚嘆のために、晩になるに綿の如く疲れ果てゐた。けれども、明日は午前一時十分發の列車で印度への旅に

立たねばならぬので、心身共に全く落ちつかなくつた。ホテルは静寂が支配してゐた。螢火は涼庭に落ち、夜は晴れて月光が美しかつた。「月やは物を思はする。」この夜歸心矢の如く、頭を上げて山月を望み、頭を低れて故郷を思ふた。

五 印 度 へ の 旅









九月六日。午前〇時すぎ自動車を驅つて印度への旅に立つ。殘燈明滅、夜色凄々、眞に旅情の切なるものがあつた。午前一時十分、列車に乗る。車窓月皎々、孤枕夢結び難し。午前六時、印度への鐵道終點 タライ・マナール Talai-Manaar 埠頭に着く。これからが愈々印度への旅だ。私がその後ぎんな氣持で「アダムの橋」を渡り、印度の旅に向つたかは、諸君の想像にお任せする。

私はつい書き落したこゝがある。列車から埠頭に降り立つた時、私はそこに濕婆教徒の奇異な風習、額に描かれた三線印（横に三線を造る）を初めて見た。ながらく書物で親しむ印度教徒の標印の一つではあるが、これをこの埠頭界限で見やうとは思ひかけなかつた。印度教徒は一般にその額に香泥や灰泥なので、その所屬の宗標を描いてゐる。これが即ちテイラカ（*Thaka* 標幟・表章）又はブンドラ（*Pundra* 宗標・標印）と名けられるもので、印度教宗派の一の表章である。この表章は毎朝水浴の後、儀軌に従つて新しく塗られるのである。

今日印度教では濕婆派（*Śaiva*）と毘紐教派（*Vaiṣṇava*）の二大派が依然豪勢であるが、その宗標は大體左の如く定められてゐる。

毘紐教派の標印

濕婆派の標印

- | | |
|-----|---|
| (1) |  |
| (2) |  |
| (3) |  |
| (4) |  |
| (5) |  |
| (6) |  |
| (7) |  |
| (8) |  |

コロンボへは四日の午後に着いて、翌五日にアヌラーダブラ見物を済ませたといふあわたしきさだから、書く材料の少いのはづかしい。これでセイロン遊記抄の筆を擱く。